ルパン
城京助の
華麗なる大冒険
津山紘一

京助の華麗なる大冒険

津山紘一

プレイボーイスパイ城京助の華麗なる大冒険

一九七九年一二月二〇日　第一刷発行
一九八〇年　一　月一五日　第二刷発行

定　価　七八〇円
著　者　津山紘一
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
〒一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　二二三〇―六三六一（出版部）
二二三八―二七八一（販売部）
印刷所　大日本印刷株式会社
0093-772231-3041
©K.Tsuyama, Printed in Japan, 1979
検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えします。

目　次

sec.1
そして、スパイは誰もワルシャワに行かなくなった
5
sec.2
あるスパイの死にかた
57
sec.3
殺人許可証を持たぬ男
109
sec.4
2001年　城京助最後の挨拶
165

●イラスト――モンキー・パンチ
●装丁――三嶋典東

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ゴクイチ 城京助の華麗なる大冒険

sec.1

そして、スパイは誰もワルシャワに行かなくなった

1

薄い恥毛が露を含んで湿っていた。

私の指先はそこだけ脹らんだ丘の急斜面を這って、腿の奥の柔らかな襞を擦りつづけていた。すでにそこはクリームを溶かしたようになっていた。そして硬い突起に指があたったとき、彼女は剝き出しの電線に触れたように全身を痙攣させて、私の高まりに添えた手を握りしめた。

突然、枕元で電話のベルが鳴った。

私は受話器を取って舌打ちした。なにも今受話器を取る必要はなかったのだ。

「一時間で来れるかい？」

矢沢の声が言った。

「今朝から頭痛がして寝てたんだ。どうやら風邪を引いたらしい」

女は身体の向きを変えて私の高まりに唇を添え、口に含んだ。静かに上下に動かしはじめた。受話器を持ってない方の私の指先を、彼女の濃い温かいクリームが伝い流れた。

「服を着るのに七分」
矢沢がのんびりと言った。「女を放りだすのに十三分。車でここまで四十分。一時間後に会おう」
電話は切れた。
私はベッドから降りてワードローブを開け、白のヴァン・ラークのシャツを選んで腕を通した。
「こんなにしといてやめちゃうの？」
女は呆けたように私を見上げていた。
私は今初めて女の顔を見たような気がした。小さな顔と大きな目。髪の長いなかなかの美人だった。小振りの乳房も型は悪くなかった。
私は女に服を放って窓に歩いた。大きなガラスを透して六本木の夜景が拡がっていた。
七分後、私と女はマンションのロビーにいた。
「サディスト！」
女はつぶやくように言った。この七分間、彼女は同じ意味の言葉をいろんな表現で試みていた。
「名前はなんだっけ？」
「愛子」
「これからもう一度ディスコに戻りたまえ。誰かが続きをやってくれるさ」
私は手を振って地下の駐車場に降りた。
十三分後、私のランボルギーニ・カウンタックLP500は高樹町のインターチェンジから高速に入った。珍らしく道はすいていた。スバルが私の右側を猛烈な速度で走り抜けた。
高速から降りたあとしばらく走って、車を自動車修理工場のガレージに滑りこませた。特徴のあるドアを開けると機械油の匂いが鼻をついた。ボンネットを開けたままの車が二、三台ころがっている。
ギシギシと鳴る鉄の螺旋階段を昇って、私は二階に行った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「二分の遅刻だ」
ドアを開けると矢沢局長が言った。
「お客様を待たせちゃいかん」
書類と電話が雑然と置いてあるスチールの机が二つ、隅に台所セット、中央に安物の応接セット。合板をビニールのコーナーでとめた天井から裸の螢光灯が冷たい光を放っている。あまり繁盛してない修理工場にふさわしい事務所だった。
「城(ジョウ)です」
矢沢は応接セットに座っている男に、私を紹介した。
「こちらは柿沼さんだ」
柿沼は座ったまま軽く頭を下げた。
五十歳くらいの役人タイプで、あまり仕立てのよくない背広を着ていた。
私は柿沼と向い合って座った。私と柿沼の中間に矢沢が座った。
「お願いして大丈夫なんでしょうな？」
ここに来る客は総て柿沼だった。依頼主の本名や地位を告げる必要はなかった。
「あなたを紹介した柿沼さんは、我々のことを何と言ってましたか？」
数年前、ソ連のベレンコ中尉がミグ25で来日した後、ＪＡＸが果した役割りについて矢沢は聞き返した。
「申し分のない処置だったと聞いてます」
私はロスマンスのインターナショナルに火をつけた。
「ナチスをごぞんじですか？」
私はうなずいた。
「近年、ナチが再び活動を始めようとしています。地下組織の一つはポーランドの首都、ワルシャワに

あります」
「ほう」
と私は言った。今度の戦争でポーランドがナチスから受けた被害は有名だった。
「どうしてそんなものがポーランドにあるんです？　それに社会主義国なんだから簡単に潰せるでしょう？」
「一度潰したことがあります。しかし次はもっと大きくなって現われました。この種のものは圧力を加えれば加えるほど強力になりますからね。従って今のところは目立った動きもしてないということで政府は黙認した形をとっています。ところが……」
柿沼は言葉を切ってあたりを見た。
私と矢沢は知らん顔をしていた。二十台の監視用テレビカメラと、二百ヵ所に設置された赤外線監視装置が、このみすぼらしい自動車修理工場を守っていた。猫より大きなものはこの建物に近づけなかった。
「最近、連中は新型爆弾を完成させたらしいのです。ＰＯＬというのがコードネームなのですが、内容はまったくわかっていません。あなたにＰＯＬの設計図を盗みだしてほしいのです」
「明日の今頃、君はワルシャワにいるだろう」
矢沢が事務的に言った。
「ホテル・ブリストルに部屋を予約してある」
「赤毛のポーランド女性があなたとコンタクトを取ることになっています」
と柿沼が言った。
「現地時間で明日午後四時、ホテル・ブリストルのコーヒーショップで彼女の方から連絡してきます」
「至れり尽せりですな」

私は軽い嫌味を言ったが、二人には通じなかった。
柿沼の姿がドアから消えると、矢沢は机の下をさぐった。一方の壁がスライドして別の部屋が現われた。
私達がなかに入ると、壁は自動的に閉じた。
畳に換算すると五十畳くらいの部屋で窓はない。一方の壁はコンピューターが占めカタカタと音をたてて作動していた。もう一方の壁は保安装置のメーターとブラウン管がならび、中央の三つには工場から出て行く柿沼の背中が映っていた。
部屋の照明は真昼のように明るかった。
コンピューターの前に二人、テレックスの前に一人、保安装置の前に二人、中央の作業台で五人の男が仕事をしていた。私とは馴染(なじみ)の顔だった。
矢沢はコンピューターの横の作業台に私を連れていった。
「やあ」
E5号が私に笑いかけた。
ここでは本名を使わなかった。私の城京助という名前も、対外部用の仮名にすぎない。パスポートにK7と書くわけにいかないからだ。
Eはエンジニア、Kは殺人の許可証(ライセンス)を持つ秘密諜報員というように区別されている。
E5号は作業台から小型トランジスタ・ラジオを取りあげた。文庫本くらいの大きさ。左側に選曲ダイアルと、ボリュームのダイアルが付いていた。スイッチを入れると流行歌手の幼い歌が流れた。
「K7、これは何に見えるかね？」
「ウイスキーに見える」
私は喉が乾いていた。

室内の温度と湿度は機械類に合せて調節されていた。機械に較べて人間の方が取り替えやすいからだ。
「使い方を説明する」
E5号はラジオから吊り環のとまったビスを外した。
「ここにレンズが入っている。ボリュームのダイアルがシャッターを兼用し、フィルムはミノックスサイズを使用する」
次にラジオからスピーカーの部分を外した。外部アンテナを引きだして、本体の外側に捩じ込んだ。スピーカーユニットを縦に本体に接続すると、なんとなくピストルのような形になった。
「選曲ダイアルが引き金を兼用し、カメラと同じ電磁式になっている。軽く触れるだけだ」
E5号はドア横の標的を狙って、選曲ダイアルを押した。歌が中断して銃声がした。再び歌が流れた。
「電源は単四電池を六本使用する。もっともラジオに使うのは一本だけで、残り五本は実弾だがね。しばらく練習してみるといい」
彼は私にラジオをよこした。
「大丈夫かい？　K4のようにはなりたくないからな」
と私が言うと、E5号は少し赤くなった。
数年前、K4号はある任務についていた。そのとき彼が持っていたのは、小型テープレコーダ型のピストルだった。弾はカセットで装塡され、PLAYのボタンを押すと発射するというものだった。
KGBのスパイと対峙したとき、K4号はそのピストルをつきつけた。そして奴の心臓にねらいをつけてPLAYのボタンを押した。倒れたのはK4号だった。弾が逆に出て自分を撃ってしまったのだ。
「あれは失敗だった」
「あんた達は失敗だったで済むからいいよな」
「K7、君だって完璧な仕事をしているとは思えんのだがね」

E5号は壁にならんだブラウン管をチラッと見て、私を見た。
ブラウン管の一つに私のランボルギーニ・カウンタックLP500が映っていた。
「あんなギンギラギンの車で敵を尾行するなんて気違いざただぜ。目立っちゃってどうしようもないと思うがね」
E5号が言った。
私は彼を無視して、トランジスタ・ラジオのスイッチを切った。
「ダイアルの周囲に純金を使ってほしかったな」
「ああ嫌だ、嫌だ」
E5号は手を振った。
「君のギンギラ趣味にはうんざりだ」
私は二、三度ラジオの分解と組立てを繰り返したあと、内部の電池をきれいに消費した。
「弾は節約しろよ」
E5号は電池ボックスを満たしたあと、予備を十本置いた。町で売っている電池と同じに包装してあった。
私は標的まで歩いて調べた。中央に四個、線の外側に一個の弾がささっていた。その一個はE5号が撃ったものだった。
机をまわって矢沢が来た。手に抱えていたものを一つずつ作業台にならべた。
パスポート、ホテルのバウチャー、アエロフロートの航空券、ドイツ・マルクの現金等だった。
パスポートを開くと、ポーランドの大きなビザが押してあった。
「これだけかい？」
私は金を数えて言った。

「予算がないんだ」
例によって局長の矢沢が言った。安くて良いものなんて、この世にないことを彼は知らなかった。
「これだけじゃろくな仕事はできんな」
「もっとほしいのなら、君の報酬から前借りしといてやるがね」
「考えてみればこれで充分かもしれない」
私は断った。ランボルギーニ・カウンタックLP500のローンがまだ残っていた。
机の上のものを背広の内ポケットにつっ込んで、私は矢沢とE5号に手を振った。「じゃな」

2

翌朝、目を覚すと私は熱いシャワーをあびた。髭を剃ってムッシュ・ド・ジバンシーのアフターシェーブローションを叩き込むと、完全に目が覚めた。
居間に戻ってカーテンを開けると、妙にしらけた六本木の朝が、まだ明けきってない空の下で埃っぽくくすんでいた。
ワードローブを開けて茶のヴァン・ラークのシャツ、ドミニク・フランスの靴下、カンタスマーラのネクタイ、ホブソンのグレー・フランネルのスリーピース・スーツを選んだ。
アンドリュー・グリマのサファイアのカフリンクとタイクリップ、グッチのベルトを着け、腕にオーデマ・ピゲの手巻時計をした。
スーツの内ポケットにルイ・ヴィトンのサイフ、パスポート、ダンヒルの22金のボールペン、パレクストラの手帳、ヒューバー・レーナーのハンカチを入れ、テストーニのストレートチップの黒を履いた。カルチェのライターとロスマンスのインターナショナルはバーバリーのトレンチコートに入れた。仕事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com